

人文・社会系

ロシア・中国などの
在外日本関係史料の調査研究



東京大学 史料編纂所 教授
保谷 徹

【研究の背景】

歴史学の基礎は、素材となる史料の調査・収集が支えています。日本史分野でも海外に所在する史料は多く、これは何も日本語の古文書だけではありません。日本に関係する外国語の史料も研究対象となります。私たちのチームは、東アジア諸国に所在する日本関係史料の体系的な調査に初めて取り組み、近年はロシアや中国の史料調査に重点を置いています。

【研究の成果】

ロシアでは帝国の旧都サンクトペテルブルクへ通い、帝政ロシアの中央政府文書650万ファイルを取る国立歴史文書館、ロシア海軍省文書120万ファイルを取る国立海軍文書館などと共同研究を行いました。調査・収集したロシア語史料には、ラックスマン、レザノフ、そして幕末のブチャーチン来航に関するものから日露戦争直前までの多くの貴重な史料が含まれています。すでに史料目録2冊を出版し、10回以上の国際研究集会を重ねてきました。

具体例を1つあげると、19世紀初頭のカラフトアイヌと日本人の交易帳簿の「発見」は話題になりました(これは日本語の古文書です)(写真1)。アイヌとの交易史料としては最古のものであり、カラフトでは初めてだったからです。しかもこの帳簿は、レザノフの部下がカラフトを襲撃した際に持ち去ったものと思われ、分捕られた多数の武

器や道具類も現地には残されていました。通交要求を幕府に拒否されたレザノフが、日本側拠点の襲撃を部下に命じたのです。分捕品の中に16世紀のフランキ砲がありました。これが戦国時代のキリシタン大名大友宗麟の大砲だったことにも驚かされました(写真2)。

中国では明清時代の皇帝文書をおさめる中国第一歴史档案馆と共同研究をおこない、上奏文へ皇帝自身が朱書きで指示を書き込んだ朱批奏摺など、辛亥革命にいたるまでの貴重な史料をデジタル画像で収集し、目録を出版しました。昨年からは中国国家博物館と共同して、倭寇画像の研究にも取り組んでいます。

【今後の展望】

これまで実際に収集できた史料はまだごく一部です。今後も体系的な調査を継続する一方、収集した史料をデジタル化し、容易に検索・閲覧が可能なデータベースとして公開・利用をはかっています。まだまだ面白い歴史の史料がたくさん眠っているはずです。

【関連する科研費】

平成15-18年度 基盤研究(A)「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」

平成19-22年度 基盤研究(A)「東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究」



▲写真1 1805(文化2)年、カラフトアイヌと日本人商人の交易帳簿(大福帳)、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所蔵。左下は記載例、煙草や上酒とニシンの交易が主な内容です(現在、解説・解析を進めています)。



▲写真2 レザノフの部下が幕府船を襲撃して持ち去ったフランキ砲(子母砲)、ロシア国立砲兵博物館蔵。砲身の組文字(左上)は大友宗麟の洗礼名フランシスコ(FRCO)を示し、16世紀製であることがわかります。右下はロシア国立人類学民族学博物館にある分捕り品の一部。